



13
2109
18





109
18

扶桑皇統記圖會後編卷之五目錄

陽成院御即位

菅家系譜角力盪觴條

野見宿称當麻蹶速と力競への圖

春彦是善俱感奇夢 於良香宅菅公試射條

陽成院意釣殿君御製 狂病乱行閑居條

異形のりのと並て釣殿の后と魘ふ圖

光孝天皇御即位 行平詠述懷歌被為謫條

三宅己月...

目錄終

行平須磨の浦まろをゆきま松風村雨まろをゆきま小戯あそびふるま圖
 清和上皇御登霞せいのじやうきやうごとうきり
 禁庭種きんていしゆ怪異けがいの條
 都良香得鬼神奇句とらかうとくきしんききう菅公一時作えんこういちしやく十詩條
 羅生門らしやうもん於おて鬼神都良香きしんとらかう詩しと嗣つぐ圖
 醍醐天皇御即位たいごてんとうていご時平乱行ときへいらんかう奪叔父妻うばうぢのつま條

扶桑皇統記圖會後編卷之五

浪華 好華堂野亭參考

陽成院御即位

菅家系譜角觥濫觴條

貞觀十一年じゆんくわんじゆんいちねん小大納言藤原氏宗こおほののりごんふじはらのうぢのむね參議大江音人さんぎおほえのねのひと刑部卿菅原是善けいぶけいせんげん三人
 貞觀格じゆんくわんかくを撰せんで奉ほうりりりり列位れつゐ當時たうじの博識はくしきなりなり日十三年八月源融にじゆんさんはつげんじゆんを左
 大臣おほおみ藤原基經ふじはらのもとねを右大臣みぎおほおみとせせれれるる此基經このもとねとと前條まへじゆ不述ふじゆるる藤原
 良相らうさうの婿むこ小こ双ふたたた智ち能のうの人ひとなりなり則すなはちち藤原時平ふじはらのときへいの父ちち小こ覺かく去きよの後のち昭宣せうせん
 公きみとと益えきせせれれ名臣なぢんなりなり又源融またげんじゆんとと中なかつ嵯峨さあが天皇てんかうの自みづか子こ小こて人臣ひとぢん小こ下くだりりりり
 嵯峨源氏さあがげんじの自みづか祖そ小こて此大臣このおほおみ陸奥りくお松島まつしまの千賀ちがの浦うらの風景ふうけいと愛あいして六条院ろくじやういん
 千賀ちがの浦うらの地景ぢけいと摸もしし大おほなる池いけを湛たてて撰せん別べつ難波なんばの浦うらより毎日まいにち夕ゆふの潮うしほと都みやこ
 運うせせ六条院ろくじやういんの池いけ中なかつ溜るみ汐しほ燒や延の虫むし乙おつ女に小こ汐しほ汲くみせて樂たのししままるる因よて六条院ろくじやういんの川がは

原院ともい大臣と川原左大臣と稱せり源氏物語小何がの院と書し由此川
原院の妻なり。同十八年十月清和天皇室祚を春宮貞明親王小徳川の御
身八仙洞へせり後水尾山入て佛道御修行あり。由水尾帝とせられり
御在位十八年なり。貞明親王御年八才小て帝位小即り。此君を五十七代帝
陽成院とす奉る。即ち清和天皇の皇子小て御母八皇太后藤原高子とす故
中納言長良卿の女小て右大臣基経の妹なり。廿二条后とす八是なり。陽成帝ハ
貞觀十年小降誕在。同十年春宮小立まり。諸室祚を嗣り。頃を大極
殿焼失せり。後なれを。いま修理成就せり。由豊樂殿小於て太常會の大禮
を執行せり。曆号と元慶元年と改元あり。同二年出羽國小夷賊蜂
起。これを征東使を下され。同三年夷賊殊小休。逆乱平定。多征東使都
凱陣。同四年太上天皇。和丹波國水尾山へ入り。同五年在原業平を奉る。

此今阿保親王の二男中納言行平の舎弟小て。美男のゆえ高く敬道の達人なり
通齡五十七才なり。同十月右大臣基経を撰政小任せり。同七年正月渤海國
乃使者斐題とて人來朝。多也。鴻臚館へ入れ。此頃菅原道真卿
も文章博士とて。唐使と應對する程の才態の人無を以て道真卿と仮
小治部太補とせられ。斐題の接伴使とたり。同治部ハ異國の吏を掌る
官あり。也。かり。され。道真卿接伴使とたり。斐題と詩の贈答あり。なり
り。多。小斐題。其俊才高作を以て。唐の白樂天の風韻有とて感。多
斐題と道真卿との贈答の詩數多。中。小殊。小其。才。高。多。ハ
贈醉中脱衣斐大使
道真
吳花越鳥織初成 本自同衣豈淺情 座客皆白首
君後進 任將領袖屬斐及生

三十一 已訓 後 月 辰 二

其その余よハ是これを略りやくす。斐ひ類るいハ道みち真ま卿けいと心こころ恨にくしみなく睦むつび交まじり多おほく。一時いつとき道みち真ま余あ向むかひ
 子こ孰じやくハ公こうの相あひま貌がうをみる。小こ大だい貴き相あひまあり必かならずす。三公さんこうの位ゐは昇あがる。一ひと布ふ。然しかれども久ひさ
 一ひと高たか官くわん小こ居いむ。遂つひ小こ脚けつ身しん小こ禍くわ乃すなはち妻つまあらん。されば官くわん位ゐ昇あが進すすむ。あらむも早はやく
 官くわん位ゐを辞やめて其その禍くわを避よこる。としたらば道みち真ま卿けい承うけりあらむ。其その厚あつ情じやうと謝あやまらむ。
 後のち年ねん果はて。斐ひ類るいの先せん見けん達たつり。斯しかて斐ひ類るいと内うち裏り。百ひゃくと脚けつ卿けい食じき應おう
 ありて後のち脚けつ暇げまを給たまりて帰かへ國くに。抑おさ菅か原はら道みち真ま卿けいとハ文章ぶんじやう博はく士し刑けい部ぶ卿けい
 菅か原はら是これ善よの脚けつ息じき男なん。其その先せん祖そ神かみ代しろ天あま穗ほ日ひ命のみこと脚けつ子こ天あま夷ひら鳥とり命のみことより出いり
 天あま夷ひら鳥とり命のみこと一名ひと武ぶ日ひ命のみこと出い雲くも國くに小こ天あま降ふりり。天あまより齋いひ。所ところの神かみ宮みやを杵き築つたの神かみ宮みや
 小こ約やく多おほく。杵き築つた神かみ宮みやハ今いまの。其その十じゆ世せいの孫まごを鸕う鷺さる渟づ命のみこととせす。是これを出い雲くも乃すなはち國くに造つく
 と定さだむ。鸕う鷺さる渟づ命のみことの弟あにを其その美み乾けん飯い根ね命のみこととせす。其その子こを野の見けん宿しゆく祢ねと云て
 天あま性じやう智ち才さい秀しゆ才さい。親おや小こ事じて孝かう心しん深ふかく。然しかれども力ちから量りやう衆しゆ小こ勝かつり。曾そうて幼おと年ねん乃すなはち順じゆん父ふ

小こ後のち成せい長ちやう小こ隨ずいハ母はは小こ事じて至いた孝かうなり。同どう郷きやう小こ勝かつ同どう太たい息じきと呼ぶ。壯さう士しあり。是これも野の見けん
 宿しゆく祢ね小こ才さい力ちから士し。生なま得とく義ぎを好このむ。宿しゆく祢ねと莫むか逆ぎやくの友とも。月つき胞ほうのごとく睦むつび交まじり多おほく
 其その頃ころハ人ひと皇みかど十一じゆんいち代だい推おし仁に天あま皇みかどの脚けつ宇う小こ。纏まと向むか珠しゆ城じやう宮みや小こ皇みかど居いなり。多おほく禁かぎ門かど乃すなはち衛ゑい護ご
 のごとく天下てんかの力ちから者ものと梓そうり脚けつ門かどを固かため。其その中なか小こ大だい和わ國こくの任にん小こ當たう麻ま蹶けつ速そく
 といふ。大だい力ちからの者ものありて。誰たれあらむ。蹶けつ速そく力ちから量りやう小こ及およぶ者ものなり。是これ小こ依いて禁かぎ廷てい。召めいす。脚けつ
 門かどの固かたなり。あらむ。多おほく食じき田でんを賜たまり。小こ蹶けつ速そくハ己おのが力ちからの勝かつる。故ゆゑ慢まん。天あま下か小こ
 我われ小こ敵てきする者ものなり。と緯いとり。朝あさ廷ていの高たか位ゐの令しきも小こ兒このごとく欺あやむ。慢まんり頗おほく。無む礼れいの行ゆき糸いと
 多おほく。公こう卿けいも渠かが力ちから量りやう小こ怖おそむ。誰たれあらむ。人ひとなり。其その終しゆう小こさ。おれれ多おほく。蹶けつ速そくハ愈い愈い
 我慢かまん小こ募ぼり。朝あさ廷てい小こ人ひとをかく。如ごとく動うご止とまらず。其その義ぎ後のち小こ春はる聞き小こ達たつ。帝みかども蹶けつ速そくハ憎にくみ
 疎そん。小こ人ひとも渠かと故ゆゑなく追お退たいけ。おれれ乱らんを起おこす。人ひとを慮あやむ。せ。ひて。春はる慮あやむ。を煩わづらしむ。
 小こ臣しん下かと召めい集じふら。て。勅しやく詔しう。一ひと人ひと中ちゆう諸しよ國こくの中なかで。力ちから量りやう強ちやう死し者ものと召す。一ひと蹶けつ速そくと力ちから

競をさせ其者小蹴速負あむとを名とて渠と追退けよとたり諸臣下奉り
諸國觸りて普く力者とて召募られも皆蹴速が怪力也聞怖と我召
小應せんとり者あれ知小彼野見宿祢朝廷の御觸渡を承りて思らるる當
麻蹴速何者ぞれをまむと朝廷の君臣と煩げりも我君の為彼蹴速と力競
一渠奴を投殺して帝の宸襟を安んじり度あれど如何せん今我母患病有
て病臥を是を見捨て召小應せんも不孝なりと思煩ひ多小勿忘ち朋友の小
勝間太息来りて宿祢小向い今度都より諸國の力者と召れ當麻蹴速小勝速
を得む召抱て食禄を賜らんとの御觸なり我斯片鄙の國小住て徒小竹木
と俱小朽果んより召小應じて都上り彼蹴速と力競せんも如何と
れ宿祢宿て我母疾より其心ふれ我母病小染めを意小任せと足下小
両親もあれ身あれ疾召小應じ蹴速と力競し運よく渠小勝あむ身の昔

雲といひ弟と帝の宸襟を安んじり忠勤なり急だ思ひ入れると勸れ太
息悦び宿祢小別を告て出雲と我足と都上り朝廷の官人小就て蹴速と競
力とれ願ひを早速官人其首と奏聞し勅許有ふより大内の庭上
小相撲の場をうと蹴速太息兩人を呼出と競力すれと命せられ小蹴
速ハ中て心中嘲り此奴出雲より遙くと死と望で上りたると不便なり
一脚小蹴殺し得せんと飽まで誇り裸小なり犢鼻禪の細曳ちり角力乃
場へ出たれ太息も裸小なり堂上小帝出脚在り脚簾を垂
て勝負と膚覽なり小簾外小大臣小臣位陞小依て列座し堂下小下
官群りて見物と先蹴速が体をみる小身材七尺五寸小て色飽て里
星の光り鼻隆準鬼鬚髭のぞ小茂生手脚の毛ハ熊のぞ所小力
しと即立まかろ金剛力士の怒るる如し又小勝間太息ハ身材六尺四五寸小

皇紀... 卷之...

色浅黒く鼻高く眼秀満身肥太りて是も手脚小力痛あまうと頭も天晴の
力者と云えり上下の着官何ぞ勝何ぞ負べんと行唾を吞息を拵て足内
小頓て兩人互にお互に寄り寄つてあつた皆一先争ふと云う同もたゞ双方
無手と引組押つ戻らば都合程小両士とも希代の力者なれを大地をどろくと踏鳴
一互の汗を滝のどろく曳く声を出し半時をくり挑合多れどもいまだ勝負分きを
えんが諸人酔るがごとく手小汗握て瞬由せむと云ふ所小太息が運や尽くせん
速の腕を揃へ行腕汗小にまであられをさる思むと云ふ所を早く蹴速六付入て雙
身のかと腕小入大唱して唾と突れをさるも小勝向三回後(翻)り付くもど
速透まらず飛くを鉄脚を揚て太息が腹肚を續き多小三脚をくり踏多程小何
く六付て堪るべし忽ち肋骨と踏碎れ太息其終二言とも言む庭上あて死し
くく帝は是を睿覽在り憎しと思召蹴速勝負小勝しを睿慮悦ひ自す

脚不與氣小入脚なるも諸卿とも蹴速を己心疎れを天晴小勝向勝よ
うと初らぬ人もあつたりも業小相違と蹴速勝をとくり(列)位望を失
ひ誰一人蹴速が勝を譽る者もなかり堂上堂下あけ及り太息が死を
収めさせ其日の角カが借止りそれより蹴速が愈慢心増長し朝廷の公卿小非
礼をなす更以前小十倍も(満)朝の百司百官末の下の郎のさまで渠と
疫病神のつく忌悪々々去程小勝向太息蹴速が為小角カ小負其場小く
落命せし更緒國小隠なり出雲國(中)でえられ野見宿祢大兄強太息
が死を悼み蹴速が挙動を憤り母の病いづ平愈せられを牙と咬でどほど
送り多る並小宿祢が母は日小患病薄らげられ一日我子と呼てやされ
より人の風貌小は你が友の小勝向太息都て當麻蹴速といふ人と競力を
對手小負て命を亡ひしゆも便なれ更なり你と太息と六兄弟より交り深

る小其仇を復さず他小安捨るハ義小疎ス似たり。且大息が妻及び渠が親族も你を言甲斐ナリと悉むる。此頃我患病日小忘り。今平愈するハ程中あつども。これ我病を念ふくけむ。日早都上り彼蹶速と競力をかりて太息が小仇を復せよ。最も勝負ハ時の運小れむ。你彼蹶速乃小力競小肩て命と落さとも朋友の信ハ立登。疾思互い。義を勸励シ。宿称大小怡ひて拜謝。是ハ難有御教訓を蒙リ。其某素リ一命と抛。太息が為小離を復まり。小母患病小深ク見捨なるハ子なるの道小あらず。朋友の信も孝道小換が。今日まで黙止のハ小母の病追々息り多上。今や御暇を給り。上六都上り蹶速と力と競い。小として。俄小発足の準備。親族家僕など小母の身の上を困小のハ。老母小辞を告て邸舎と立出勇進んで都を望。路を急だつ。往

く浪速國。今度の當國小跡を垂多。任吉明神。糸結。老母の無変を祈。且今度都上り蹶速との競力小勝を得。丹城を凝と初念。それより大和國珠城の都上り。官人小就。是ハ出雲國の住人野見宿称と呼者。おて當麻蹶速と力と競。遙上り。同万望。此言と奏聞。かり玉る。願。抗奏の官人承諾。右の由奏聞。小即ち勅許あり。多の官人蹶速を召出。宿称と競力小命を。言渡。これ蹶速。一議。小及。領掌。退れ。心中小独笑。野見宿称と。人彼太息が。我一脚。の下小命と落せ。と不知。人我と力と競。人変を望。火小入。夏。の虫。小ひ。好んで。其身を亡さんとす。愚さ。己。思。人小。言。其日。遅。待。小。斯。禁。廷。先。例。殿。前。大。庭。小。競。力。の。場。と。構。帝。高。座。小。出。所。在。一。百。司。百。官。ハ。堂。上。堂。下。小。忝。列。一。更。已。小。整。正。小。官。人。蹶。速。宿。称。兩。人。を

呼出^{よびだ}一^{いち}カと競^{けい}争^{そう}る由^{よし}を命^{いのち}ず。兩人^{ににん}低頭^{ていとう}して令^{しづ}と受^う俱^く退^{たい}きと衣服^{いふく}を
脱^{ぬぎ}赤裸^{あくな}小^{せう}ちりて立^{たち}出^でる。蹶^{けつ}速^{そく}が人^{にん}表^{ひょう}前^{ぜん}小^{せう}速^{そく}れは小^{せう}及^{およ}ず人^{にん}野^の見^み宿^{しゆく}祢^ね如^{ごと}
何^{なに}ある人^{にん}品^{ひん}と見^み小^{せう}身^み材^{ざい}六^{ろく}尺^{せき}七^{しち}八^{はち}寸^{すん}。色^{いろ}白^{しろ}く月^{げつ}秀^{しゆ}。手^て脚^{きゃく}の力^{ちから}痛^{いた}節^{せつ}立^た彼^か太^{たい}息^{いき}
小^{せう}比^ひもれが段^{だん}勝^{しょう}一^{いち}様^{やう}小^{せう}壯^{さう}士^しあり。もれも蹶^{けつ}速^{そく}小^{せう}比^ひて尚^{なほ}見^み劣^{あつ}せれ。小^{せう}と諸^{しよ}人^{にん}心^{こころ}
中^{ちゆう}小^{せう}危^{あや}し勝^{しょう}負^ふ如何^{いか}あんと手^て小^{せう}汗^{あせ}握^{ぎつ}く見^{けん}物^{ぶつ}せり。去^さ程^{りやう}小^{せう}兩^{りやう}雄^{ゆう}互^ご小^{せう}一^{いち}揖^{いつ}。やと
うけ声^{こゑ}するや否^{いな}俱^く小^{せう}寄^よ合^あして刻^{とき}合^あ追^お廻^{まわ}。組^{くみ}解^{かい}いつ争^{そう}ふ。蹶^{けつ}速^{そく}六^{ろく}分^{ぶん}
小^{せう}對^{たい}人^{にん}を見^み慢^{まん}り。一^{いち}様^{やう}小^{せう}拉^ら付^{つけ}んとすれど宿^{しゆく}祢^ね天^{てん}性^{せい}狂^{きやう}捷^{せつ}の達^{たつ}人^{にん}ある上^{かみ}也^{なり}機^き人^{にん}
小^{せう}勝^{しょう}れらる壯^{さう}士^しもれを對^{たい}人^{にん}の虚^{きよ}実^{じつ}と考^{かう}呼^こ吸^{そく}を量^{りやう}り或^{ある}透^{すう}一^{いち}或^{ある}立^た廻^{まわ}りて十^{じゅう}
変^{へん}万^{まん}化^かの手^てと確^{かく}た蹶^{けつ}速^{そく}が疲^{つか}うと待^{まち}ふる。案^{あん}のどく蹶^{けつ}速^{そく}六^{ろく}分^{ぶん}一^{いち}舉^{きよ}小^{せう}勝^{しょう}と
とんと思^{おも}ひの外^{ほか}宿^{しゆく}祢^ねがも小^{せう}繰^くられて六^{ろく}七^{しち}分^{ぶん}の精^{せい}力^{りき}と勞^{らう}。大^{たい}小^{せう}怒^どりて面^{めん}
色^{いろ}大^{たい}のどくなり。頭^{づか}上^{かみ}小^{せう}煙^{えん}を立^た叫^{こゑ}ひ吼^{こゑ}りて掴^{つか}もうると宿^{しゆく}祢^ね尚^{なほ}も繰^くり透^{すう}り

前^{まへ}小^{せう}在^あるともれを匆^{さう}急^{きゆう}とて後^{あと}小^{せう}廻^{まわ}り。左^{ひだり}小^{せう}在^あるともれが匆^{さう}急^{きゆう}右^{みぎ}小^{せう}出^い其^{その}疾^{はや}き更^{さら}
蝶^{てつ}鳥^{てう}のどくもれを蹶^{けつ}速^{そく}さふ見^み通^{とほ}る更^{さら}能^{あた}とぞ祢^ね精^{せい}神^{しん}疲^{つか}れ呼吸^{こそく}已^や小^{せう}早^{はや}鐘^{かね}
を撞^つが如^{ごと}宿^{しゆく}祢^ねハ蹶^{けつ}速^{そく}が力^{ちから}の抗^{かた}と察^{さつ}して。二^に点^{てん}の透^{すう}間^まを付^{つけ}入^い物^{ぶつ}身^みの力^{ちから}と
腕^{うで}小^{せう}入^い大^{たい}喝^{かく}一^{いち}声^{せい}曳^{えい}やと言^いさる蹶^{けつ}速^{そく}が胸^{むね}板^{いた}を唾^{つば}と衝^つをうともの大^{たい}の漢^{かん}屏^{へい}風^{ふう}
を倒^{たお}すがどく仰^{おほ}さる小^{せう}喘^{ぜん}と仆^ふると宿^{しゆく}祢^ねハ透^{すう}さず走^{はし}る。力^{ちから}脚^{きゃく}と揚^あて蹶^{けつ}速^{そく}
が肋^{あしほ}骨^{こつ}と續^つさる小^{せう}蹴^く更^{さら}四^し五^ご脚^{きゃく}。然^{しか}のどくもれも敵^{てき}の胸^{むね}板^{いた}を臨^{のぞ}む磐^{いわ}石^{せき}の確^{かく}よと
力^{ちから}と亮^{りやう}て唾^{つば}と踏^ふをれを何^{なん}も公^{こう}の堪^かぬ。蹶^{けつ}速^{そく}ハ胸^{むね}骨^{こつ}肋^{あしほ}骨^{こつ}と踏^ふ折^おれ叫^{こゑ}ひ音^ね
し。目^め口^{くち}鮮^{あま}血^ちを吐^はて手^て脚^{きゃく}を張^た其^{その}休^{やす}息^{いき}ハ絶^た小^{せう}多^た。是^{これ}をうと堂^{どう}上^{じやう}堂^{どう}上^{じやう}の
公^{こう}卿^{けい}大^{たい}夫^{ふう}下^げ官^{くわん}小^{せう}ゆる追^おまうやまうと譽^ほる声^{こゑ}遠^{とほ}近^{ちか}小^{せう}震^{ふる}ひて少^{せう}時^じハ鳴^なも止^と
ど下^げ郎^{らう}の輩^{はい}ハ日^ひ来^{らい}悪^{あく}とぞハ蹶^{けつ}速^{そく}が肩^{かた}を女^に嬉^{うれ}とて庭^{てい}上^{じやう}小^{せう}躍^あ舞^まのあ
屍^{むさし}の陰^{かげ}ハ走^{はし}寄^よて土^ど砂^さを蹴^けくもあし唾^{つば}を吐^はくもあし宿^{しゆく}祢^ねハ念^{ねん}願^{げん}のや

皇代正統記卷之八十一

野見宿称
 當麻
 蹶速
 力競
 の圖



當麻蹶速



野見
 宿称

皇朝書畫會
 後
 卷五

太皇の仇を復して心中大に怡ひ殿上の御簾の方を三拜し徐くこと退たるる
帝甚く睿感在り改めて宿祢を階下召よ以後八禁門守護の役を勤むる
よりの宣旨と下され執政の大臣小藤原が一族を追拂ひ其所領の地を悉く宿祢
小と云ふ宿祢と勅詔ありしは是れ依て宿祢の思ひより朝廷の臣下となり
多くの采地を得て怡々更限方深く君恩を謝しむるなり踰速が宿祢の爲
小其腰骨を踏折れし事とて當麻の田地と諸人腰折田と言ひける事とある
宿祢と踰速が競力本朝相撲の起源となりて其後朝廷折く諸國の力者と
召よ競力をさせし與せさせの事と成り然るもいふ事定りし式法とて
あつりたる事野見宿祢時より考へて相撲の式を定め又角力の事と定りし所
相投緊捻旋の四手なり手小各十二手づつの変化ありて四十八年とあり是れ
競力ハ力量の強弱を競るの事と稱すれを對人を投殺し蹴殺しなど

まゝれども斯て八國争の基とありて人を損むる甚く宜しき事とて對人を殺
更と堅く禁じたり。これを其以後角力小對人を殺す更止り此野見宿祢が
則ち世官家の鼻祖とて相撲の祖神と仰れ出雲の大社の末社の中小祭られ亦
泉州石津の社の撰社なり大野見宿祢命と宗系より角力道小依人必と
尊信すむ神なり

因小曰朝廷相撲の節會ハ入皇四十五代聖武天皇の御宇神龜三年七月
二十八日初て諸國の力者召よされて禁廷小於て角觥をとりせり是れ角力の
節會の起源なり是より年中行事の二とあり朝廷より諸國の力者と召よ小
遣りし官人を部頭使と稱し猶相撲の式別小一書と著し委々述せられ
む茲小畧とす

俗も野見宿祢ハ故郷の老母を迎へて孝親と奉り。勿論朝家小事て忠勤

尽一これ帝の御覺も他勝を追々官位を進めり。茲に禁廷の皇
 后日葉酢媛命崩させり。これを大和國校々城の盾列の池前の後小菟并り
 七の命と定のひつる。此頃中へ六殉葬とて上古の悪風義遺り。帝は六
 女御小御身近事をもり。公卿女臣ハ其帝其女御崩しをを生かす御葬
 リ小殉よあり。帝仁此殉葬の義を深く悼ませり。此義を相止りた
 中や有と群臣と召て勅問あり。古より為きれる式法あれ。今更奈
 何も轉ず。死せしむ。満座の公卿冠を傾け。維り入勅答言上る人由
 かし。時小野見宿祢階下小糸候と先刺り。諸臣下の勅答と如何。奏聞有
 すと耳と頷て。聞居られ。一人も言と發する人あれを見。堪て言と發し
 小臣の愚見。心も憚あれ。心中存する。且啓奏せ。六忠勤あらず。依て
 愚案の趣を述ゆ。抑殉葬の更往古より。式法とハ。中せども。後小生

か。人を埋め殺人を不仁の甚。義と。登。卑臣が愚見。依を填。以て
 殉葬せ。る。程の土偶を造り。これを殉葬の象。とて。陵に埋り。其人
 く。小御暇を給り。宮中に出。む。殉葬の式法。相立。數十人。人を埋め。殺
 する。由。及。後代。勤仕。多人。大患。除。仁恕の道。推。弘。一。端。と
 由。成。い。ん。と。言。上。下。を。緒。御。実。心。付。帝。斯。と。執。奏。せ。れ。る。小。帝。聞。召
 て。御。感。斜。あ。ず。実。い。く。も。や。せ。り。如。此。人。を。朕。さ。何。を。患。ふ。死。急。死。宿。祢。命
 命。して。殉。葬。す。死。男。女。の。形。及。六。牛。馬。と。土。以。て。造。り。せ。り。勅。詔。か。り。一。執。奏。の。公
 卿。王。命。と。奉。り。宿。祢。宣。旨。と。や。せ。れ。る。小。を。宿。祢。領。掌。宿。所。歸。り。出。雲。
 飛。馬。と。ま。り。土。師。三。百。人。を。呼。上。り。自。己。指。揮。し。て。多。の。人。形。牛。馬。緒。の。調。度。す。て
 不。日。小。造。立。を。朝。廷。へ。献。り。え。る。帝。膚。覽。在。り。て。御。倭。比。伎。を。予。此。物。を
 其。并。り。小。殉。に。せ。埋。む。と。先。格。を。失。つ。と。又。生。る。者。と。埋。殺。小。及。む。一。卒。兩。得。の。事。

らひ仁道是小過とらひにちどうしんはこわと御賞美在ごしょうびざい御葬送ごそうじょうの式滞しきじりたり相済あひすまりたる
今度殉葬こんどじゆんざう小預こよるが公卿こうけいを臣しんに令しんや生なまむる理葬りざうらるるに歎なげた悲かなしむる
小野見おののすけ宿禰すくねが妙案めうあん依よて殉葬じゆんざうと免まぬれ皆死みなしる身みの難がたし心地こころぢに恨うらみを限かぎり
かく衆人しゆじん落おちる野見おののすけ宿禰すくねを伏拜ふくぱいし神かみのごとくおと尊たうととせむる

因よ小こ右みぎ殉葬じゆんざう小當こあり男おとこ女むすめ命いのちと助すけるといふ且ま葬まう小殉こじゆんひ休やすめれ宮中みやちゆう
小使せうし使つかれん更さらも觸穢ふく穢けの憚おそり有ありて悉しつく御暇ごいひを給たまはる別わかれ一村いちむらとよま住すまりぬ
ウハタリ是こゝを尸村しむらと村むらに上古じやうこの人ひとも是こゝと婚姻こんいんせず火ひを俱ともせむるといふ今いまの
宿しゆくといひ穢村けむらのごとく卑ひむる者ものは古ふるの尸村しむらかるといふ

借かりて帝みかどの野見おののすけ宿禰すくねが今度こんどの功績こうせきを深ふかく御賞ごしょう譽よ在ざい御恩ごおん賞しょうとて大和たいていの國くに
菅原すがはら伏見ふし見の里のさとを賜たまはり土師とじの職しやくに任まかせられ土師とじの姓しやうを賜たまはり是こゝは依よて野見おののすけ
見宿みのすけ禰ねの世よ美目みめと絶たつ菅原すがはらの里のさとに移うつり野見おののすけの姓しやうを改あらためて土師とじ臣しんと自みづか称なづす

朝廷の御葬式の更をを掌つかさどりたる

評ひやう小こ白しろ孔子こうし曰いわく備ひを作つくる者もの夫その後のち亡なんとな是こゝ其人そのひと小類せうるいする者ものと作つくる成なりて
たり是こゝも宿禰すくねの如ごとく是こゝと見み同おなじと論ろんずかるとを埴物はひものと造つくりて殉葬じゆんざう小
換か換か幾いく千せんの生靈せいせいを助すける更さら莫な大たいの仁德にとくなり先哲せんてつも是こゝを仁者にしやの勇ゆうと謂いつ
ぬとと譽置よめお置おきとす宜よろしむる其その裔孫えいそん代より朝廷てうていの臣しん下げ小列せうれつ今猶いまなほ連綿れんめんと
冒まりて更さら是こゝ天あまの報應ほうおうと可よ謂い己おのれ而をと云いふ

春彦はるひこ是こゝ善ぜん俱く感かん奇き夢む 於お良ら香かう宅たく菅公すがこう試射ししやう條ぢゆう

土師とじ臣しんより十母じゆぼの末孫まつそんと從したが五位ごい下遠げん江介えけい土師とじ古ふる人と謂いひはるる人ひとと
思おもはれむる先祖せんぞも野見おののすけ宿禰すくね埴はひ土つちを以もつて土偶とぎうを造つくり殉葬じゆんざうの生靈せいせいと取とり
て土師とじの姓しやうを賜たまはり我われ母ぼ小妻せうさいといふ今いまの世よ土師とじの葬送そうじょう小預こよる者ものの名なを以もつて心こころ小快せうくわいと
ど不如よ居住きぢゆうの地名ちやうめいと姓しやう小せんといふと一遍いっぺんの生口なまぐちを造つくり時ときの帝みかど先せん仁に天皇てんかうの捧たもつ

て土師の姓を改め菅原と姓賜ふん妻を願ふれを即勅許ありける也
 怡ひ其より土師を改めて菅原とせしめたる時小天 備古入の子息と菅原清公
 といひ博學多才とて大學頭小任せし清公の子息と是善とせしめ
 ちて學才秀れを文章の博士大學士小任せしめし是善卿曾て妻伴氏と
 娶れ夫婦の中睦まけれも如何なる妻や年と重めれも懐妊の沙汰あり
 されは是善卿是を愁ひし伊勢太神宮の神官山田の渡會春彦位下代
 菅家の御師ありて内外両宮世継の男子と授ける也祈禱せしめ家士
 嶋田忠遠といふ武士と使者とて勢州山田下代春彦小世継の男子祈願
 義と頼み遣されれを春彦謹んで領掌し其より沐浴齋戒して両宮と宅
 一勧請し菅家世継の義を丹誠を凝し祈りし七日満する夜の曉小春
 彦不思議の靈夢を見し所ハ高天原と覺し其の緒神在せる中より

六七支の神童と出で春彦小向ひ祈菅家のく小世嗣を祈る也
 天帝其丹誠を感じしを以て菅家の世嗣とありしあり九彼家小
 生とたを且暮你と睦み交るなりと告めしを今夢覚るる春彦大小
 怡びて想らふ夢ハ臍氣の二子あり事小と思ふ夢とて思ふを夢小入る
 妻ありといふも是ハ神明我が誠心を感納在し執りあはしむる正夢小疑ひ
 とて兩宮と拜し祈願成就の悦びの祝詞を上靈夢の事と菅家言上と承
 和十二年夏四月山田を發足と都に上りける也小菅原身善卿ハ世嗣祈
 願の義と渡會春彦頼み自身も朝夕伊勢兩皇太神宮と心中小祈念せ
 られり小承和十二年夏四月上旬一夜の夢小詔の庭中と道逢すれり
 遣水の上なる處殿の肩小年の頃五支むりあり位高小皇子の容貌美麗なる
 也と傳し居る也是善卿無心不思議小思ふれ祈ハ何國より來りける也

と何國の雅とて同じたる小童子袖をうた合せ九小父中なく母中なく君の子と
あまなりく此処未まらぬ其くの子をみひて慈愛を垂りてと長者と答
るる小童子是善卿大少怡悦あり是天子此子と授我家を相續せりや
かゝんとも點首あつて来りぬいよ子も家を嗣すれ男子ふれば今より
你を子とすやと抱えとて誼へると思ひぬ忽ち眼覚て一場の夢なりけ
り是善卿大少望を失れ諸小年来世嗣を得ん妻を欲せずとくる思夢を
んんんと本意なくかひて一兩日と過されぬ小の渡會春彦勢則より上り
来り是善卿小編とて靈夢を蒙りすと終りたる小は是善卿奇異の思と
せられ斯て予其後予も思夢ふあつて正夢なりとて頼母く皆ひ春彦
小八子の引出物とて呼ばれらるる果と北堂伴氏其月より妊娠ありとれむ
是善卿怡び斜めを胎養遺る方なく心成添月の満る成指と奪て待れる小

裡なく其年暮りて明とて承和十二年乙丑正月北堂聊中産の悩なく平小玉
の下に男子降誕あり是善卿の御悦あり更なる館の上下勇と怡むすと
り者なく一門縁体の人より慶賀の使者門前市とわたり是善卿八望の如
く世嗣の男子と儲一更偏小渡會春彦が祈禱の丹誠小因とてろなりとて平産
の更と使者とて勢則山宙の春彦が方告知されれば春彦も大少悦び使者
とは道とて祝いの為都上りたり然小菅家小誕生の若君何たるのゆや出生の
後昼夜啼むつりて止むず是善卿御夫婦是を厭れ薬湯を用ひ或神の
守札佛の咒符かゝり掛させ百般手と竭されれば曾て其險なく啼むつり
更止まりたれば皆治とてあまされぬ小渡會春彦使者と伴とて京者
菅家(泰上と若君の御誕生を慶賀し)かり首あれは是善卿願ひ北堂の丙舎
(泰上若君の御良を見よの子小誠小玉の御脚男子小ては是善卿先年夢ありとて)

神童の面貌も露違はれ心申奇異の思ひをおすうち若君八例の如く頻る啼ぶ
 ふふり春彦其母を問む乳人答へて脚誕生ありてより未だ昼夜も啼むつら
 めハ醫茶加持祈禱百般手と足せも啼止むまよと結多ふと春彦懐胎
 小かり試み乳人が抱く若君を抱くより若君の春彦の面を人むひて忽
 ち啼止む以完示く笑させぬれ北方を先り乳人侍女们也是ハ不測あ
 更らふとて乳人侍女の手へ抱とれ又啼出ぬ春彦が抱するもこれ啼
 止む由是善卿も不審の更思れ春彦と館小留て若君と守傳をさす
 春彦も若君の斯別添ふ付て脚側を離するさ不忍山田の私宅小
 息春躬在て家敷と脩る小更定を身ハ菅家小留り家士の如く昼夜も若君の
 側を去と守傳れり此春彦若君の頃より白髪生三十才過てより頭髪
 盡く白く成るも世人皆白太夫と異名する菅家の若君と推名と阿字と呼

多う三才小あむの頃より春彦を白太夫と呼ひて弥まり馴睡ひひ
 一時白太夫若君と負まの乳人侍女も付添て物箱其歸路内裏の談天門の邊
 を通りたる若君春彦も負まの額のつらとあがめぬ小館へ歸りひて
 後自らふちある手小筆と紙をのび談天の二字と書り其筆勢自空海和
 尚の筆意似るれ是善卿と首り春彦乳人其余の輩も驚嘆此若君
 漸く三才ありひひ手習ひも内裏の額の目見て早く其文字を記
 憶ひて書りあめ筆勢墨色凡あふ人入てハ在字後世恐る筆と
 衆人舌を巻て心ま感是善卿脚夫婦も是を奇く信脚籠意深く是より
 若君を菅秀才とぞや斯て七才あり春其頃博學宏才の中ハ高紀都の
 良香良香とい人の許へ入門させれ筆道文字を各々れふ一を門下十知の
 俊之あれ師の良香も驚嘆せり更數度及ひたり斯て文徳天皇の齊衡二

年萱秀才十才なり其正月の半の頃春の夜の空快く零庭前の梅花も
 咲白の梅月妍を争ひて限なく面白景色なり是れ是善卿飽なむ其
 を催され萱秀才の向ひ你良香小就て物字ひとれを持作の更をも少聞つ
 り今宵の風情を詩小作てんやと戯ふ問はるる萱秀才唯くとして才の辞
 する色もわく筆紙を執て月夜即事と題し更小案と練りて体もわく
 月輝如暗雪 梅花似照星 可憐金鏡轉 庭上玉芳馨
 一首と賦と書き出のひる是善公詩と作の更初なり是善卿大い感
 ずれ你の成童の幸小だも至るところ佳句と吐更予の猶及んと御賞美
 あり我家を興する者此見かると心中未頼母を思われ其後天安二
 年十月末に臘月小獨其の詩を賦せし其詩曰
 玄冬律迫正堪嗟 還喜向春不敢賒 欲盡寒光休幾干

將來暖氣宿誰家 冰對水面聞無浪 雪點林頭見有花
 可恨未知勤學業 書齋窓下過年華
 と作りゆゑに都良香大い感ずれ萱秀才の才機我の勝る更遠
 我是か師も又愧る小絶ると自己慚愧し是善卿の館へ了對面ありて
 賢息萱秀才の御更智才當世其右小者なり良香は其者の門下小膝と
 屈すおれ人あらず願ふ余人小就て學しめんと辞退せられ是善卿敢て
 承引かく何糸さる更のいおれ唯り道中門弟とて教導たひりて強て頼れ
 るる由良香も己更を得ど此上師弟の名を除た學友と成てとも小文道を修
 行しおれと帰れ其後心中小萱秀才を學すの友とあり愈懇心交れり
 ちん儲清和天皇貞觀元年萱秀才十五才ありて元服しひ辯を道真と呼
 ぶ是善卿の御始なり及む北堂伴氏も斜あり手嬉りひ鶴龜の千世万世

つけて菅公の初冠を祝し二首の哥を詠せしむる其哥曰

久々此月乃ちもなるむらり家のうせむ吹せしるる那

其後日四年十八才にて進士及第文章生補せしむる六年二十才にて從六位下の叙し九年二十三才にて文章得業生補せしむる十年二十五年にて正六位上昇進し十二年少内記に任ぜしむる十三年二十六才にて其年の春の比都良香の詠にて若殿上人聚り弓と射て與合多と云く菅公至りのひうを人へ耳給ひ道真を儒家の生立常小扉を因圓を出せと字の意の虫雪と集りつる学業小心を委らるる弓矢の六手やうりも更も有すく本末も知ざる下毎度手跡待たぬとて我徒彼人の後を取て友報の弓一平所望して耻辱とせむと談合あり菅公の来りのを待受り小春日の長閑なるより弓管て戲まひあひ公

する色なり是六より折ふ赤り逢うので我も一平侍んとて弓場小立出弓前より射的の小向ひより右なる射と治り教ひし射術鍛煉の身の備由斯中とぞ許あり人々案小相違しあつ猶形容むらう賢くしをも真の事争うと思を結て見居るうち菅公を移しひを定めて兵切て放しよふ其矢過るどの真中を發止と申る是を始として十枝の矢二枝も空矢たり不くの射中の一更誠小百發百中と申つるを手煉かりるるを衆人憫景我を忘れて呼と感ずるむらりなり都良香先刻より物陰小在て見物せしむる感嘆のありし出で大小賞美種種の引出物を進せ酒宴を催して管侍をさう其後元慶四年小脚父身善卿薨去ありる菅公脚年三十六才なり其翌年正月加賀權守を兼て加刺任國小赴たひ次の年任満て都へ歸りし則ち其年渤海の斐頭来朝する由權治部太輔となりて存問使といかりしむる誠小本朝の名臣と菅公の御身上をわがりと云く

猶萱公神と崇祭られし人の追の御事跡次の巻も委しく記す

陽成院憲鈎殿君御製

狂病言行岡居條

陽成院の帝御成長かりし朝の公卿梢心を安んずる不圖御狂病発して百
般乱行なりしを女官近臣們大かひてあしき其根元を尋ふ色情の妻ト重
起まり其故其頃鈎殿の君と世々雙ある美人在り是仁明天皇弟三乃皇
子時康親王後光孝天皇弟一の姫宮にて御座せしが陽成帝の御為大從叔母にて御
幸中王上より違ふ長トゆひるは帝一度垣間見ゆして深く懸想しゆひ千束乃
御文を通りせりも鈎殿の君平く御甥の帝も別添むる流石にゆく愧
りれ妻の思召て二度も御返しの文もなかりあつて難面ての過さるゆひは帝
はいよく浮岩ゆひ一時二首の御製を遊ばれ彼陸奥の錦木あど千束余る文
乃敷を封ふ切で返しゆ難面されれゆ忍ト今玉の緒も絶るむる物思

あんど物あつれあつてめむひ一御玉草の奥の書て贈ゆひる其御製

竹坑波根乃峯よりあつるゆひの川急を憶てけりて淵とかりぬる

とあり御哥の意ハ常州筑羽山を此面彼面の陰溢る淵より流出る水美奈野川
と久川へ落合て底去るぬ淵とあるて我も君を憶る心の積りて深れ思小沈じど
との御製かりしや倭哥の徳ハ猛死武士の心然も慰め男女の中にも和るし書目
て鈎殿の君も此御製を吟らひて感情を催しゆひかあらふやと浅く思
目とよの争難面て止まるゆはと御心解遂に船のりかみわぬる御返事の
文をせりゆひは帝大御御成あり候て迎へるゆひて錦帳の内小玉の枕とゆひ
む借老の御製深く是より鈎殿の君を片時も御側を放ちむる今やて君を
蒙りのゆひ女御宮妃の國の巢守とかりし枕の塵と俱に積るゆひのゆひは
て鈎殿の君を呪咀すゆひ帝の御行迹を悪する小風鏡正叔母君と玉殿近る



釣造 五形
の



釣造

寄て幸ひのよ六世の乱る端なりおど言觸し或鉤殿の君の帝の宿願へ通ひ
廊下小種く怪た姿の者と造置て怖るんごまをれをま系り心弱れ御本社の鉤
殿の君度く厭もい遂に重た患病お歩即ゆひる帝大に該をせのい典茶の
官小委緒寺緒社小勅詔して加持祈禱させのいも露むくの験もなく終小
成のいるおと帝の御悲致限りちの李夫人別と漢王の悲と揚貴妃の
唐帝の歎きも今ハ御身の上となり哀涙お御衣の袂を朽ゆひ是より何となく
狂くおせのい局くの女房の寐さぬ思んで渡御なり其黒髪を根より非
くと剪捨せよの鋒とて寐る宮女の陰所を突て殺し又時中あは時近侍
の臣下と糾められお御剣にて御手討小けのい聊おても御意小叶さる更われハ男
女の差別なく御太刀を抜ゆひて追廻斬殺するもあつ傷けのいも吹く彼鉤
殿を咒咀せ女官ハ未だ御手討小運るもい誰かのいなり帝の御狂乱ハ鉤殿の

亡魂の為業なりと言出しやう夜陰おわを長陞中殿あひて鉤殿の君乃
瘦細り白れ衣の上小丈なる黒髪を振乱しき物凄れ面白く停立のい見受
怕る魂断て向絶しそれ心神悩乱病困む女房達も多うり帝ハ御狂病
愈厲し一時公寮の御馬小駕れ庭上より御殿へ騎上宮女官人們を駈け
ゆひ又一時ハ官女を裸躰おと庭上追下大を闘ハせし怕る惑を與ゆひ或ハ
地下の男女と捉て樹の末へ下せ下より戦を令突殺し或ハ蛙を多く取寄させ
蛇小吞せ大と猿と噛合させゆひ偏殿の討王の行迹小異あはれ後
と女房緒臣も恐怖て御前小忝仕る者人なり斯てハ帝位小在さん更奈何有
んと危踏ぬ人もなうり紫標政基経公思慮を回らせれ一時君の御前へ伺候
頃日ハ御徒然小えさせり明日臣等御舎にて三十番の競馬を催し
典へまういんあは御幸なり給り心と奏せられを帝ハ御生得馬と誣る吏を好

せむし上御徒の折かれ大不悦をせり子細かく執許ありたるも基経公疾
 より二条陽成院の殿中小室を構へ四方の蚊手を入如何なる怪力勇悍の者にも
 押破るる事ありし置帷を垂て是を隠し翌日早且小御迎のり内
 々れを帝へ欺謀と露知むと空輦小乗て出御かひひり基経公御隨臣
 駕輿丁們小密意を言合足早小陽成院へ渡御せ進せ暗小御剣を奪とり
 件の二室へ入り外面より扉を固く鎖されれ帝大い驚きせのひ是如何計らひ
 ぬやと問ふ基経公威儀を正され恐あがり君御狂病暮らせのひ科めれ者
 數多傷合せのひも天照皇太神への畏り小御位を下しなり此御所にて御保難
 進せしかり願ふ御心を鎮めし静小御養生はるるやと奏聞ありり帝大い小
 泣悲しむのひも小謝りども叶せむと遠小閑居の御身とあせりり力あは
 経公八林延へ歸られ火急小使者を廻し緒卿を集へ至上御狂病頻ありり

密位をすぢせ奉り此六何れの宮と王位小即なるを評議ありり小衆
 其身々の貝負の宮方と勸めて群議さし決せず左大臣融公正しく嵯峨天皇
 の皇子めれを我こそ帝位を踐せむと其色を以めりされれも基経公承引せ
 られず且人臣小列りたる人踐祚あり例ありと故仁明天皇弟三の皇子の時康
 親王仁徳を備へ節儉を守り己小人を礼ふ賢君なれ此君を九五の位小即
 ちふ小如くすとして時康親王を五十八代の帝と申せんと定められ大納言藤
 原良世日冬緒中納言在原行平日源能有と首とて満座の公卿面を見合
 彼時康親王を行迹正た君あがり御年己小五十五才にて余り小年團のひ且先達
 甚死去あり鉤殿の君の御父かり彼鉤殿の死靈也小先帝狂病を疾りり世
 小風説とれを上皇の御憤りも量り又御舅日前の宮と帝位小即られ人更奈何
 あらんと思えれれも當時權勢肩と並る人めれ攝政の釣かれを誰り一言と発する

人無り多む。左大臣融公堪めて進出謀政の詞を以て時康親王を帝位に
あま 然れんを余りの似氣ある事ありん。再應思慮をからずと難せられん。
しよ て緒卿双方の白をあらめ。序唾を吞でひえ居るところ未座より藤原緒葛
ゆう とて勇悍強勢の人位陞を進出。衛府の太刀の柄を碎るむ。小握結満座
ま を吃と見廻し。難く太政大臣の命を背く人やあつと呼つて眼を瞋し二言と言。斬
い ちくを死勢ひを示し。融公も緒葛が強勢小怕し。其後、初を弁せしめず
しん 且戀んでひえられん。是も依て遂に時康親王を帝位に定む。議小評定一決し
しん 列位其只退出せられん。抑基経公數多を在す宮の中。小年圃のひ。時康親
てん 王を吹挙し帝位に定められ。深た故ありて全く和哥の徳小因とせたり。其奈
しん 何といふ。去年正月時康親王野外出て自身野辺の若菜と摘む。以て謀政基経公
しん の許へ贈り。ひさの折す。余寒強く若菜の葉小雪氷つれられ。二首の哥と添ふ。

君がためたる乃野み出てつゝ来つむ我衣半小もきを降つ

と詠し。ひさの基経公右の御哥と吟と大に感情と催され厚く御礼を仰上
しん られん。其時より時康親王を眞に厚小心起まり。素り親王の御為性篤実
しん 眞正の君あり。旁が於て今般帝位に進められ。時康親王ハ仁明帝の皇子
しん あり。文徳清和陽成三帝の御世と経て世に埋れ。いとも遠く暮し。ひさの
しん 一品式部卿親王と稱し。赤りは人あり。小思由り。今度十善の帝祚
しん 小定まり。ひさの古骨再び脂づれ。枯木小花の咲く。貴賤とも目覚め。死変ふ。かひ
しん たり。平城嵯峨淳和の三帝。專ら詩文を好む。ひさの朝廷の公卿皆詩賦
しん 作文小心を寄る。小時康親王一首の哥の徳。小王位に即せむ。ひさの
しん 諸人歌道小心を傾け。和哥の道大。小貞り。追々名人も出来たり。小誠小侍哥
しん 神代

光孝天皇御即位 行平詠述懷歌一依為綱條

時康親王其経公の吹奉依て遂小人皇五十八代の帝と崇められし... 光孝天皇と中奉たり則ち仁明天皇の皇子とて御母贈大政大臣経公の女澤子とせり先年渤海國の使者王文矩との者時康親王を相し... 此皇子大不貴相あり後年必皇天位小即ち帝と云々... 王文矩相法小疎しと排勢多し其言のどく今晚年て帝位と踐む... 諸人初て王文矩が先見の明なると感づり又藤原仲實との入よ... 人を相し多し密宗其舎弟宗直小向ひ你時康親王小く心を小て侍せし... 彼君の骨格尋常小あらず後必と帝王小あせり言り是す王文矩... 小劣ざる相法の達人とのを。去程小光孝天皇元慶八年二月三日小御即位在... 是年十月大嘗會と執行れ翌年正月仁和元年と改元あり先帝成小太上

天皇の尊号と贈りし其経公の撰政を止られ閑白とかり身是本朝閑白の権と... かりそれ撰政撰め統るの義とて帝御幼稚小在す或女帝と若く先帝の如... 睿慮不正の君と脚病身とて朝政を聽も更能ざる時の官職なり閑白と... 後漢の代より始りて閑白と訓字義なり是君の裁判より更を閑白と... 下、通達する官職なり至上光孝天皇其経公より脚年長し撰政無用の... 官名の是を止られ閑白とかり其後閑白其経公撰津國の内小遊獵の地... 我賜り刺し其経公の五十の賀を禁中て執行せし其経公の脚子時平卿十六才... 小成まざる禁中て元服せし至上脚年づり冠と加ひひたり戒前代例... なら義と諸人羨も思はるかり。是年十二月仁壽殿小於て僧正遍照小七十の賀... を給ひたり是遍照の良峯宗貞と言順彼渤海の使者王文矩が来朝... 時宗貞其饗應の役を勤め時康親王も席と睦く交り進み脚病身を

思臣の故と云。去程小帝八脚博織なる上脚年園を万機の政を聴召し脚
 明く仁政を専とまのひ小松の宮小在す時市民もや小金銀を借用す
 一成り今度悉く召出され利足を加へて償ひをかりおひ多る也下々の人民帝徳を
 美し天腊名君ふとて大不悦伏し四海波静小を治りたる時小帝脚生得遊痛
 を好まむの神泉死小脚幸しりて小雁鳥を放して池の鳥をとらむ其他所へ
 脚狩の脚幸ありたる仁和二年十二月四日小川へ脚狩の脚幸なりむくと或臣下の
 中任せ中納言在原行平と大雁鳥の雁鳥飼小を宣下しり多る抑在原行平とや
 平城天皇の皇子阿保親王の嫡男小て業平の舎見かんと王氏を出て遠くお弘仁
 九年小誕生せられ伊都内親王養子とかりり天性明敏聰慧小て幼年より
 経史を学びて機緒人小勝と天長三年在原の姓を賜り承和二年藏人頭小補
 せられ齊衡二年従四位小叙し因幡守小任せられて其任國へ赴く折京と出るとて

刃心びて通女のみと一首の哥と詠てつらつら其歌小曰

まろれりふむの山乃峯小おあるまろく一歩も今く入るらん

此哥勝とる秀逸なりと世人賞美しあひ貫之由古今集小加へり斯哥道
 小由達し博学宏才小て経済の道小賢く國益小成命小を是彼計定
 りれれれ元應三年中納言小任せられ行平と雁鳥と使吏小妙と得られ
 りて卿相の中小行平小遺恨ある人君小勧めたり行平小雁鳥飼の役を命じむ
 一不脚得物多しとと奏しり是行平小耻辱とせられ巧みたりと君
 と何の脚心もつせむとと鷹鳥飼の宣下ありたり行平右の倫命と奉りて大不
 不興我王氏の末棄する上中納言小任せられ知命の齡をも過せしむる果家の
 役義を蒙ること安しと憤りれれも倫言あれを辞退せんやゆり已更
 と流し小領堂へまかしく心快くして樂まむ疾むの致仕むる耻辱ハ蒙る

まじきものをとて。意小浮むす。迷懐の哥と詠ぐ。一際花麗ある。狩衣の袖小書付てそれを看し。御狩の供奉小従がれる。其哥小曰

公羽さび人ふとがめを狩らゆゆらとと。田鶴ゆわくある。

哥の意ハ我々年園て若々れ狩衣を看ると老てせ美と飾ると緒人登りこらふ更おれ是も今日むらむ明日官職を辞す身なりとたり公羽さびとハ老る身小伊達を飾る更なり元て公羽さび小女さびあど詠るハ爽々たる更おてやると寂る意ハ水たを神さびとといふ社の魏々として尊げお見こ有更をゆかりと然小帝路次おて不斗行平の狩衣の哥と御覧ありて大不逆鱗す。彼が哥を我王孫おて官中納言小任せれ殊更年園る小何ゆらる卑劣の役を命どるを明日ハ仕を辞して退隱の身と成る。一の意思を一首の中小こめ人か処めをとよとと斗ととて田鶴も啼かるとつねハ朕を恨み不徳の君なりと世余風聴とる詠哥なり

急だ追返し。彼が官爵を削て横州須磨へ流罪小行ふ。官目下りれ即ち勅詔をやせ途中より行平と追返して執事居ませ主上還御まりて後横州國須磨の浦を左遷せれる。行平ハ思がけあれ罪と得て。近流わが。摘行の身となり力なく住別。宿所を出て津の國須磨へ流され配所のおひいと矮しれ飯屋小入てこる小前。海後ハ山おて只往及者とてハ漁する漁人必汲。蜚小女のこみ。磯の松吹風の音も寂し。友叫らす千鳥の声も哀れて小夜の枕も寐覚がらふ。る物。物物腸を断るハなれを。一首と詠じて都の友人へ贈られる。其哥小曰

こらふ小前のおひいと。須磨のうらた。藻汐たれつり。づとこらふは

斯て憂配所不明。暮され。小日の朝後の山より鄙びる声。小何う廻つて。數十人の海未女濱辺を望で来る有る。将小一行の斜馬雲小連り。半天の雲霞。地小移るといふ。行平。渠們をこらる。小其群の中。小容貌鄙む。す由ありげある

二人の小女余の番們より後れく歩み疲し休みえられたる行平家士生田庄前
向ひ彼後より二人の蟻小女を是れ呼来れと命ぜられ小より庄司領堂手して走り
出二人の小女を將て入り主君の目前へ連出て坐らせり。二人の女はいと畏入る体中
て蹲り居り。行平幻をけ。你们何國の者か何方の里か任かると問われ
む二人の年長よりと覺れ女庄司小科紙を乞ふ一首の哥と手早く書て。つまず
くふき出り。行平與ある妻思れ手取上てんる。其哥小曰

まゝ浪乃より渚小世をすごとと蟻の子かれを宿ゆまごさす

と書より手跡も無下小拙うされど大い感ぜられ者どもうふ実の
住所を告よと再三問れり。小哥書る女答る。我々姉妹はもと讃岐國の者
ふてまむいふ縁故ありて今此後の山の興なる。田井畑の長が許小召使れ侍
り。行平安て庄司小向ひ你彼田井畑と申人へ往其長と申り。小對面

此二人の女を予が洒掃小得させよと乞まりいと命ぜられ。庄司唯く
座を起田井畑へ赴れり。行平二人の小女何是と問て配所の後を
あらうらち其日の黄昏小生田庄司田井畑の長を日道とて立歸り行平の面前
へ伴ひ出り。行平長小向ひ是か二人の女容儀卑く。汝汝業とせん。便
かた妻ならん。予が配所の洒掃させり。思かり。されを予得させよ。二人の女
の語る。成歩をえ。八續の産ある。如何なる故か。你が方へ召抱り。や子細あり
物語よと問。長小長小低頭し。數ある。賤の女と申。者と脚見あり。予
御目鑑。難有。此二人の小女の身上。衣れ。物語の長。長を
御尋。結。抑。此二人の者。八續の産。人塩飽大領と申。者の女。わて。小姉ハ
七才妹。五才の頃。母死亡。後二年。父大領。後妻と呼。迎。程。一人の
出生。名。后丸と。呼。大領夫婦の。寵愛。大方。あ。ず。後。小。彼。後。妻。初。乃。程。二人

乃継子之所生の^{まご}く慈愛の^{あはれ}ひ小后九が出生せし後二人の継子と憎む方支離^{あやま}て
 の^た過^たりとも大領ハ後妻の色小溺^{おぼ}して是を悟む姉妹の者憂^{うれ}苦を堪忍^{こら}び継母
 小^つ仕^つへ小^つ継母ハ猶^{なほ}中^{ちゆう}二人を憎む夫大領小^つ百般^{ひやくぱん}絶^た言^{げん}此^こ両^{りゆう}女^{にょ}と追^お亡^{じやう}し謀^まる^るへ
 兩人とも堪^たりて館^{くわん}を抜^ぬ出^し大領が家長^{けいけ}年^{ねん}礼^{らい}兵^{へい}衛^{ゑい}ける者^{もの}の方^{かた}至^{いた}り尼法師^{にぼうし}とも
 かり亡^な実^{じつ}母^ぼの跡^{あと}を吊^たひ^ひえし生^な見^みる小^つ兵^{へい}衛^{ゑい}ハ主人^{しゆじん}の女^{にょ}といひま^ま若^われ姉妹^{あな}と
 法師^{ぼうし}おせん^{せん}を^をく^く八^は嶋^{じま}の里^{さと}小^つ住^{ぢゆう}居^い一^{いつ}族^{しゆく}高^{かう}松^{そう}何^{なに}某^まと呼^よぶ者^{もの}の方^{かた}二人^{ふたり}の者^{もの}と
 預^あ置^おひ^ひ小^つ彼^か継^{けい}母^ぼ是^{こゝ}を^を付^つて又^{また}大^{だい}領^{りやう}へ^へ絶^た言^{げん}一^{いつ}年^{ねん}礼^{らい}高^{かう}松^{そう}兩^{りゆう}人^{にん}姉^{あな}妹^いの女^{にょ}と舍^あ藏^{ざう}
 て己^{おの}く^く側^{わき}室^{むろ}と^と脚^{あし}身^み死^し亡^{じやう}し^し後^{のち}后^ご九^くを^を害^がむと塩^{しほ}飽^あの家^け督^{とく}と押^お領^{りやう}せんと巧^{たく}
 小^つ妻^{さい}小^つ告^こる者^{もの}のいと実^{じつ}々^々小^つ告^こる者^{もの}と大^{だい}領^{りやう}其^{その}絶^た言^{げん}と信^まる^る後^{のち}添^その^の勸^{すす}小^つ任^{にん}廿^{にじふ}年^{ねん}礼^{らい}兵^{へい}
 衛^{ゑい}と館^{くわん}呼^よ寄^よ物^{ぶつ}陰^{いん}小^つ力^{りき}士^しを^を隠^{かく}置^お年^{ねん}礼^{らい}が油^{あぶら}断^たを^を金^{かね}を^を金^{かね}カ^カ士^し相^あ圖^ずく不^ふ意^い
 小^つ虜^{らふ}小^つ牢^{らう}獄^{ごく}入^い置^おて後^{のち}妻^{さい}暗^{あん}小^つ食^{じき}の中^{ちゆう}小^つ鳩^{たう}毒^{どく}を^を加^かへ遂^{つい}小^つ兵^{へい}衛^{ゑい}と毒^{どく}殺^{ころ}す

猶^{なほ}も^も兄^{あひ}の^の阿^あ波^は小^つ者^{もの}小^つ余^{あま}高^{かう}松^{そう}何^{なに}某^ま練^{れん}政^{せい}の^の女^{にょ}え^え隠^{かく}を^を急^{いそ}に^に馳^ち向^{むか}
 て^て殊^{こと}仗^{ぢやう}と^と告^つる^る小^つより^{より}元^{もと}来^{きた}無^む道^{だう}の^の阿^あ波^は一^{いつ}様^{やう}小^つ及^{およ}む^む守^{まも}る^る三^{さん}百^{ひやく}余^{あま}人^{にん}の^の兵^{へい}卒^{そつ}
 率^{りつ}て^て高^{かう}松^{そう}が^が宿^{しゆく}所^{しよ}寄^よ付^つ無^む二^に無^む三^{さん}小^つ攻^{こう}ま^まる^る高^{かう}松^{そう}ハ思^{おも}ひ^ひけ^けあ^あ不^ふ意^いを^を伐^うと
 防^{ぼう}戦^{せん}已^い小^つ難^{なん}義^ぎ小^つ及^{およ}び^びく^く兩^{りゆう}人^{にん}の^の小^つ女^{にょ}對^{たい}ひ^ひ弓^{きゆう}矢^やと^と身^みハ^ハ折^を小^つ金^{かね}と^と惜^{おぼ}ま^まぬ
 小^つの^のた^たれ^れ某^まハ敵^{てき}中^{ちゆう}小^つ斬^{ざん}入^いて思^{おも}ひ^ひ程^{ほど}敵^{てき}と^と怖^{おそ}れ^れ斬^{ざん}死^しす^す脚^{あし}身^みも^も我^わ知^ち已^い
 の者^{もの}津^つ國^{こく}須^す戸^この後^{のち}も^も甲^か丹^{たん}畑^{はたけ}の^の長^{なが}絆^は落^お行^{ぎやう}彼^か者^{もの}小^つ身^みを^を寄^よて^て金^{かね}と^と全^{ぜん}し^し時^{とき}節^{せつ}
 伏^ふ待^{まち}て^て父^{ちち}大^{だい}領^{りやう}殿^{でん}小^つ身^み小^つ罪^{つみ}多^{おほ}く^く父^{ちち}を^を訴^うぐ^ぐ再^{また}い^い父^{ちち}子^こ和^わ順^{じゆん}の^の期^きを^を得^える^ると^と練^{れん}小^つ
 是^{こゝ}小^つ姉^{あな}妹^いの^の者^{もの}杖^{ぢやう}柱^{ちゆう}とも頼^{たの}む^む年^{ねん}礼^{らい}小^つ後^{のち}高^{かう}松^{そう}と^と討^う死^しせん^んとい^いふ^ふ小^つ力^{りき}と
 落^おし^し注^{ちゆう}高^{かう}松^{そう}小^つ向^{むか}ひ^ひ妻^{さい}姉^{あな}妹^い也^{なり}小^つ脚^{あし}身^み死^し戦^{せん}死^しす^す何^{なに}の^の面^{めん}目^めあ^あて^て小^つ存^{ぞん}金^{かね}侍^じる
 小^つれ^れとも小^つ自^じ害^{がい}一^{いつ}日^{いち}道^{だう}小^つ往^{わう}ん^んと^と言^いふ^ふ高^{かう}松^{そう}種^{しゆ}々^々練^{れん}す^す從^{じゆ}者^{もの}と^と添^そて^て後^{のち}小^つ落^お
 一^{いつ}其^{その}身^みハ^ハ遂^{つい}小^つ敵^{てき}軍^{ぐん}の中^{ちゆう}弛^ち入^いす^す小^つ敵^{てき}を^を切^き断^た斬^{ざん}死^しす^す此^{こゝ}兩^{りゆう}女^{にょ}ハ^ハ船^{ふね}小^つて

行平
須磨
松風
村
戯
上
る



田井畑の長



中納言の平

松の巻

松の巻

松の巻
中納言の平
田井畑の長

我方(落来り)今(結り)の(お)も(し)ま(逐)小(結り)高(松)が(書)信(を)さ(し)出(し)身(り)と
 泣(く)頼(ま)い(ち)便(な)き(お)ひ(抱)て(今)日(まで)養(ひ)置(い)ち(り)と(一)五(十)と(落)も(な)く
 長(く)と(結)る(も)ど(姉)妹(の)小(女)懐(旧)の(涙)ふ(れ)て(伏)沈(つ)る(行)平(安)毎(日)感(慨)
 昔(も)今(中)継(母)の(強)害(を)薄(情)く(し)を(こ)二(人)の(女)の(由)有(け)不(足)え(り)由(理)
 かり(予)此(配)所(小)在(ん)か(ら)召(使)ひ(勅)勘(脚)免(を)蒙(り)帰(洛)せ(可)然(ま)う(ひ)得(さ)す
 左(の)予(年)嗣(て)右(女)と(左)右(召)使(を)好(色)が(し)思(ふ)者(も)有(る)れ(も)左(小)非
 とも(只)配(所)の(徒)茲(を)慰(めん)と(乃)り(乃)り(と)長(小)二(女)の(身)の(代)り(て)ま(ろ)の(金)を
 支(ら)れ(れ)長(小)大(小)悦(び)拜(謝)と(ま)歸(る)斯(て)行(平)二(人)の(小)女(と)酒(帝)と(せ)れ
 る(唐)山(吾)朝(小)も(閑)居(する)身(ハ)松(風)村(雨)を(友)と(す)お(ひ)た(れ)と(其)小(准)十(一)
 妹(を)松(風)と(呼)妹(を)村(雨)と(号)て(憂)を(慰)む(便)と(せ)れ(る)其(后)三(年)迄(て)流(罪)息
 免(の)宣(旨)と(蒙)り(飯)洛(あり)折(松)風(村)雨(ハ)數(考)の(引)出(物)を(は)り(れ)た(二)女(ハ)

大(子)余(波)を(惜)泣(く)御(見)送(を)平(して)後(姉)妹(と)も(小)髻(を)と(り)て(左)と(な)り
 亡(母)及(小)卒(礼)高(松)の(後)世(を)悵(ふ)吊(ひ)多(る)と(ん)

清和上皇御登霞 禁廷種種怪異之條

前(太)上(天)皇(ハ)和(陽)成(上)皇(の)御(在)病(と)歎(死)り(是)朕(ハ)凡(宮)惟(喬)親(玉)一(旦)の
 辞(讓)も(な)く(帝)位(小)即(小)天(照)太(神)の(各)り(な)り(と)追(思)召(悔)せ(む)ひ
 逐(小)御(落)飾(存)斗(數)行(脚)の(と)と(て)近(江)丹(波)檣(津)木(の)山(く)寺(と)順(拜)
 かり(お)ひ(多)る(是)偏(ハ)後(太)上(天)皇(の)御(狂)病(御)平(愈)の(と)と(と)申(え)り(也)も(至)
 尊(の)御(身)と(て)狂(く)諸(國)行(幸)の(よ)以(更)お(其)御(在)所(を)定(む)は(れ)上(上)也
 是(ハ)患(ひ)り(前)上(皇)小(近)侍(奉)る(公)卿(の)行(幸)の(度)毎(ハ)東(西)南(北)走(り)て(死)と
 遂(惑)し(々)一(時)閑(白)基(經)公(上)皇(を)種(く)練(養)し(れ)る(小)太(上)皇(仰)多(る)朕
 近(國)の(壘)壘(場)と(拜)と(巡)る(更)朕(の)身(の)後(世)佛(果)の(為)お(わ)る(と)後(の)太(上)皇(の)狂(病)平

愈を祈らん。朕近國を巡るとも敢て他所を尋るべし。丹州水尾山に
 奥なる古木の檜の下と朕が居所とす。其の要用あると云ふ右の檜の下に到りて待たば
 たく他所往とも遂に水尾山へ還るなりと宣ひしより。基任公も諸臣下の入
 くも漸く心を安んず。其後又例の如く。後初めより出脚なり。より更へ還脚が
 一むざんを。臣下の面々を丹州へ脚迎お奉れよとて。衆人水尾山へ登りしむ。小
 果て年経檜の一大樹ありて樹下の岩あり。其上上皇の脚座具有多れ。扱
 と兼ての勅詔あり。此所へ還脚なり。より一と。一日二日と待たしむ。小更へ還らせ
 けり。余り待て。山奥より脚座を更へて。山残る所なく。尋もれども
 更へしむ。是は不審なり。とて都へ入を。支せ。閑白殿小斯と辨へ。れを。自余乃公
 卿も追々水尾山へ馳着群集して。丹波二國の山々を尋もれども。猶脚在所相
 知。と諸卿手と空りて。忙勢と。惆果多し。一の臣下。彼岩上の脚座具の。公の。外。更。り

ぬる。如何と。いふ。ぞ。列位。氣。鎮。め。鼻。息。を。き。く。嗅。み。実。も。脚。座。具。の。香。氣。似
 羅。沈。香。も。勝。り。て。馨。く。後。小。漸。く。小。香。氣。高。く。なり。余。薰。山。中。小。満。り。と。多
 人々。奇。異。の。思。を。か。し。縁。して。白。昔。天。智。天。皇。八。崩。脚。の。後。脚。権。小。脚。沓。の。遺。り
 有。て。尊。嚴。無。り。と。登。天。へ。む。と。謂。り。今。上。皇。も。正。く。昇。天。も。亦。た。下。登
 む。何。時。や。此。所。に。待。た。し。む。も。其。途。有。ら。ず。不。如。都。へ。還。り。此。趣。を。奏。せ。ん
 小。へ。と。衆。議。一。致。し。脚。座。具。と。り。て。皆。都。へ。還。り。有。り。次。弟。と。奏。聞。し。れ。ば。帝。頗。る
 脚。跡。を。あ。つ。て。昔。々。日。本。國。中。山。の。奥。浦。の。端。ま。だ。宣。旨。を。傳。れ。前。太。上。皇。の。脚。行
 方。を。尋。搜。せ。せ。り。も。終。小。見。え。せ。む。と。借。八。跡。昇。天。の。い。ふ。小。更。極。ま。り。と。て。即
 ち。水。尾。山。を。陞。り。清。和。天。皇。と。益。を。奉。り。り。時。小。室。算。三。十。一。才。小。か。せ。り。水
 尾。山。を。常。小。愛。り。ゆ。ひ。も。水。尾。帝。も。亦。た。小。実。小。不。思。議。の。脚。更。あり。其。後
 主。上。脚。方。違。の。脚。幸。在。り。る。夜。の。路。次。小。て。盲。人。數。十。人。亦。連。ぶ。ら。る。が。敬。言。繹。乃

中少人 追々 大不周障 途迷ひ多し 主上密聲の内より 脚覽在り 不便の
更小思召還 脚の後 沙汰あり 浴中左牝牛と 街小店屋と 建させ 無縁の
人を其所にて 養ひ住せし 且す 盲人の 官措を 定め 入り 其上座する 盲人を 座
頭と言ひ 入せり 実小盲人より 者 此君の 脚哀憐を 仰ぎ 尊じ 願ひ 脚更の 後
年 帝親 崩脚 在り 後 緒圖より 盲人 们都より 先孝天皇の 脚忌日と 吊ひ 奉
る として 三条 四条の 川原の 群集 七月廿日より 廿六日まで 脚追福の 法事 かな 更
年 恒例 となり 諸人 是を 入んと して 川原 群集す 残暑の 節 かね 見 是 納涼
と 纏り 但 脚正忌 八月 廿日 脚法更 七月 執行の 八千 蘭盆會 兼 行意
と 今 世 盲人の 官位を 久我家より 免 授けらる 久我 光孝天皇の 脚末
華族 する 故 たり 盲人の 官位の名 目 八右 川原の 脚吊ひ 小四 度 上り する 者と 四 号 小
八 度 上り する 四 度 と 号し 十二 度 上り する 勾 當 と 号し 十六 度 上り する 者 を 檢 校

と 号 盲人の 極 官と する 凡 七 盲人を 疑ひ 深 丸者 小 己 們 日 士 集會 する 小 座 席の
上下 争ひ して 稍 ぬす ぬ 鬪 争 亦 及 する 小 斯 宦 柱の 掟 定 たり する 入 其 争ひ の 止 多 ぬ
偏 小 光 孝 天 皇 の 脚 仁 惠 亦 因 とも なる 難 有 なる 仁 君 たり たり
因 小 日 今 京 都 の 做 小 六 月 の 祇 園 會 より 四 条 川 原 緒 人 群 集 する 納 涼 と
稱 する 八 右 の 盲 人 の 川 原 へ 法 更 なる 見 小 集 集 り 遺 風 たり
時 小 仁 和 二 年 の 冬 より 三 年 の 春 へ けて 大 裏 小 種 の 怪 異 あり 其 二 を 一 日
禁 廷 小 大 へ かる 曇 の 集 る 更 幾 百 子 と 又 數 甚 多 其 形 常 の 曇 と 八 大 小 異 亦 腹
大 小 脹 れ 眼 の 玉 亦 大 小 して 黒 光 り 皮 膚 の 班 文 五 色 小 見 小 穢 小 這 更 其 小
徐 小 啼 声 長 悲 小 衛 士 の 輩 大 小 怪 小 妻 入 數 小 是 を 門 外 追 出 入 する
小 逃 る 更 亦 小 徐 小 御 門 外 出 入 する 間 申 なく 又 跡 より 忽 然 與 妻
這 出 更 小 除 限 かり 衛 士 亦 大 小 困 果 攫 を 以 て 搔 捨 れ 又 其 亦 現 出

のち、大床、這上る小御殿の簀子の下より長大なる蛇數千這出て、上り來り、
後、小大床、這上る小御殿の簀子の下より長大なる蛇數千這出て、上り來り、
或呑んとす、衛士も又是を怪とみ、攫退る小をて余せ、鼻の根を却て、僕等の
妻よと攫を止て、あがめ居る、尋常、蛇が蛙を吞み、ひある小、其とハ妻変り、
鼻ども口と張て、蛇と吞る、其勢、甚く、或蛇の首より吞め、或蛇を二
小啗切て吞め、あり、其他種、小と遂、蛇を吞尽し、鼻ハ勝鬨を揚が、く、吞小
鳴て、人も追ざる、小御門の外、這出、悉く消失、緒人評して曰、是ハ先帝成蛙を集
蛇小吞せて、鼻ども、其剛ひを示す、あんと言合り、す、二時、御坪の内、松乃上小
異形の人、きて、手小弓矢を携へ、矢を放つ、妻、毎夜止む、其矢の落る所を、く、攫ども
敢て、まれば、直宿の衛士、樹上の怪を者、と弓矢と射、矢の中、時、消失、了、間
もなく、又現れ、矢の中、時、ハ、とこら、其笑、声、公、數十人の、声、の、く、あれども、現れ、す
者ハ一人、なり、是も、緒人の、評、小、先帝、罪、ある者、と、樹頭、ハ、せて、射殺、し、ひ、其、

靈の所、為、か、と、沙汰、し、右、ホの、妻を、先、て、或、血、塗、裸、躰、か、る、女、の、傳、す、
を、入、り、者、中、あり、或、無、首、殿、の、歩、行、す、と、区、者、も、あり、其、風、鏡、宮、中、宮、外、小、隱、か、
女、房、違、ハ、怕、惑、の、帝、も、睿、聞、在、り、と、患、ひ、の、ひ、る、小、仁、和、三、年、秋、の、初、り、重、た、御、怒、小
海、せ、の、ひ、る、百、官、百、司、大、小、孫、た、緒、寺、緒、社、小、命、と、加、持、祈、禱、を、修、せ、り、和、氣、丹
波、の、医、官、ハ、良、劑、を、捧、て、御、茶、と、調、進、し、献、さ、し、も、更、小、其、驗、か、る、遂、小、八、月、廿、六、日、室
筭、五、十、八、女、小、て、崩、御、か、り、の、ひ、る、と、哀、れ、御、在、位、僅、三、年、な、り、女、御、宮、妃、緒、皇、子
姫、宮、の、御、數、々、中、も、更、か、る、公、卿、大、大、の、愁、傷、大、方、あり、下、市、人、農、民、も、悲、泣、せ、
る、ハ、か、ら、く、な、り、此、ど、も、さ、て、有、果、へ、ま、い、れ、御、葬、送、の、儀、式、を、敷、正、し、葛、野、郡、之
屋、の、里、小、松、原、多、田、邑、の、陵、小、葬、り、奉、り、る、其、後、縁、圖、も、畢、て、仁、和、三、年、丁、未、十、一
月、十、七、日、春、宮、定、省、親、王、を、関、白、基、任、公、大、極、殿、綏、ひ、ま、り、五、十、九、代、の、帝、位、小、御
奉、ら、る、宇、多、天皇、と、や、な、ま、り、八、此、君、小、て、在、せ、り、御、母、皇、后、班、子、と、中、仲、野、親、王、の、御、女

日本書紀卷之八十一

か。此君ハ先孝帝弟七の皇子小て此時二十才カセリ。先帝孝皇ヲ數多在
チケルガ、親王小松宮小あり多。時是思是定定省の三人の皇子小召れ
御戲レ小。自然予帝位小登む你達何変を望みやと問セリ。小脚矯子是
忠ハ汝等賜リムと仰レ脚二男是定東國を賜リムと曰ハ脚三男定省ハ春
宮小立まわると曰ハる。さる依て先帝脚即位在て後定省親王を太子小立
シ。今度万葉の密位小即セシムと芽出度ウカ此君兼て内々王位を踐
カると脚望ヤシクもい。侍従小テおリ多頃より時賀茂社ハ脚社祭
ありて祈願を篋ウシムと世人更不知ヤ。小君登極の後寛平元年と改元セ
シ。其年の十月脚祈願成就セ。脚欣悦小因テ賀茂社小初テ臨時の祭を執
行。谷の神慮と清シム。其外正月元旦小四方拜の儀式也。此帝より始ムハ
日月七日小七種の脚粥を献ス。更也此君の脚宇と始リケル。主上ヤ。諸臣下

小忠勤を励と爲小と。南殿の庇乃障子小唐土代々の功臣の画像を繪所
巨勢金岡小命て描レ。其是を賢聖の障子と稱セリ。南殿左右の庇小建
ル東西各十二枚ツ。小て都合二十四枚カ。其東方の障子小八殿の伊尹周の太
公望漢の蕭何曹參灌嬰傳寛王陵唐の杜如晦房玄齡貞世南魏徴
長孫無忌以上十二人カ。西方の障子小八殿の傳説周の周公且漢の霍公
魏相蘇武劉禹杜茂唐の姚思廉孔穎達陸德明褚亮許敬宗以上十二
人カ。抑巨勢金岡と呼ミ。画子。其頂無双の名人也。曾て大内の秋の丹
馬と描レ。小其画馬毎夜抜出て脚坪の秋と食ハ。と。其各画の丹
絨を凝シて面貌佩帯とレ。の傳と勤考寫し出サ。画あれ左。其
如く言語との声ハ。我耳の聾ヤ。疑ヒ。君と看ト。其群臣
其精密也と感歎せず。人カ。後年延喜の帝の脚宇小野道風小命て

此人物の續を書しりぬ弥潤色せし此障子なり。如此聖明の君ふて在すよ
関白基経公藤原良世卿菅原道真卿ふんよ良臣補佐下されぬ万機
の政平く四海昇平ふて万民業と樂と戸がぬ御代とと稱る。

都良香得鬼神奇句

菅公一時作十詩條

宇田天皇を補佐しむる名臣の中中菅原道真卿公前も詠しむる凡人中てハ
在まじ。不測の事とも多りりる。其中の殊小奇異なるハ彼都良香一時初春乃
頃まはつる正月の夜半多る臆お霞む月の面白れす奥に乗じて邸舎を
ま出其所もたつ道遥。覺て東寺の羅生門の辺にり柳の風小吹れ
然る。不斗心頭小浮むさ。氣零風梳新柳髪。と一句と得常
小是を我おろる名句と得る。此句小相應す。此句對句がわと稍停とて
然煉ととれども是とと思ふ對句も字まさりたる小忽ち羅生門の棟に其死

怖ろし鬼神現ま出高声。氷消波洗舊日長。と唾らるる良香大

鬼神我を佐て此金玉の佳句と給へり。拜謝とて。勇を依とて我郎

一照の句と得い高判りたり。つる下と言れり。道真卿手小とて押頂

先上の句と吟。次の句と見て何とと思ひり。久翁を用て居置座を立て手

小物学せれ。師弟の礼義と重んずる。成ると思ひ是。殷懃なる御

御自作して後。後の句人間の作あす。必定鬼神の句して。後名

し。敬ひたりと仰る。小。良香仰天して。心中此人。人あらず。神も通され

羅生門の
鬼神
都良香の
詩と嗣



羅生門の鬼神
都良香の詩と嗣
三十三

つりと敬馬嘆し。自作ありと言。更の今更耻しく後悔して。緘小卓見の程。伯
入いかり。実ハ如是くくおていと有。次第と語れれ。道真卿も微笑し。むい
実さる更して。御作の絶妙さ。小感。鬼神對句と吐。あぐぐれ。西向も
御自作は。並小いと返。い。其後寛平二年の春。續岐守小任。せ。れ。任。國小
赴た。の。二。國の政。敷と裁判。あ。南條郡。滝の宮の。官府小任。の。ひ。て。暮春の比。松
山小遊。び。風景を眺望。し。ひ。入。奥の。あ。まり。小。二。句の。詩を。賦。し。其。詩。小。曰

低翅沙鷗潮落曉

乱糸野馬冲深春

然小其年の四月より七月小い。る。ま。雨降。ど。早。續。於。農。民。大。小。困。窮。し。れ。を
道真卿。是。を。憐。れ。む。ひ。城。の。山。の。神。小。祈。誓。言。し。祈。雨。の。壇。を。築。れ。是。小。登。り。て
丹。城。と。凝。し。雨。を。祈。め。し。小。弟。三。日。月。より。大。雨。降。出。し。さ。か。が。盆。を。傾。る。ぐ。と。く
三日。三。夜。小。止。む。く。降。徹。し。夕。小。と。市。人。農。民。腹。鼓。を。ち。て。躍。り。舞。怡。也。更

限りなく國の人民皆道真卿の盛徳と深く感。此殿永く此國小在りと祈り

因小曰續州滝の宮の里人。今。以。て。七。月。二。十。五。日。例。年。滝。の。宮。お。て。踏。哥。を。た。り

天満宮と祭り。なる。俗。是。を。滝。の。宮。踊。と。稱。す。と。云。く

斯て道真卿。自。寛。平。三。年。任。滿。都。還。り。の。式。部。少。輔。小。任。せ。れ。左。中。弁。を。兼

り。の。程。か。藏。人。頭。小。進。り。の。人。又。曾。て。宇。田。天。皇。の。勅。命。小。依。て。類。聚。國。史。と。し。る

書と撰り。ひ。る。が。今。年。落。成。と。献。し。二。百。卷。の。大。典。小。て。本。朝。小。い。す。が。斯。程。乃。大

部の書籍有。更。なり。是。日。本。書。紀。より。下。の。曆。史。の。史。と。集。り。部。類。を。外。ち。人。の。考

見。小。便。し。た。か。り。小。か。り。と。云。帝。大。小。層。感。在。し。其。功。勞。と。御。賞。美。あり。て。是。御。褒。衣

賞。と。賜。り。り。今。年。奥。白。大。政。大。且。基。経。公。應。と。し。る。悪。瘡。と。患。り。小。漸。小。車。り

終。小。患。去。あ。り。る。通。齡。五。十。三。支。方。り。帝。深。く。惜。ま。せ。り。以。昭。宣。公。と。益。を。給。ふ。と

御。子。息。時。平。と。參。議。小。任。し。り。日。四。年。菅。原。道。真。卿。參。議。小。任。せ。れ。り。日

五年弟の皇子敦仁親王を春宮小立玉（り）。此時帝の睿慮を以て時平の妹を以て春宮敦仁親王の御息所（す）。道真卿の御女を以て二の宮齊世親王の御息所（す）。久し。九年九月道真卿古歌三百首と撰出。新選万葉集と題し上下二巻なり。一首毎小御自作の詩を副し。詩數亦三百首也。日六年八月遣唐使を立らんとて菅原道真卿を大使と。紀長谷雄を副使と定めて入唐させんと。專ら其準備をなさせしむる。其頃唐朝小叛臣有て兵革起り。唐の代大乱し。由りて遣唐使の義を止し。日七年小左大臣源融公薨去有る。壽七十三なり。然小帝ハ御生得御多病小在。朝政を聽せしむ。懶く思召。一時道真卿を召れ。朕が身多病小て朝政を聽む。台心りかちなれ。万民の所訟滞りて恐る。世の憂愁となす。されば帝位と太子小繼んとす。如何と勅問あり。多道真卿色を正し。是ハ勅詔小てい。

いもの恐おが。君の御老年とや。わのい。春宮ハ猶御幼年小。世玉ハ御位。成讓せ玉。人吏並。さす。君御多病小て在す。朝政の義ハ臣等とも。執計らひ。今去。世治させり。と練奏あり。多小。帝勅許在。御讓位の御沙汰ハ止。今去。六月道真卿五十才。あせ。其御年賀を祝し。進せん。人達貴。賤。吉祥院と。寺。奉會。詩。哥の題を探りて慶賀の意。迷酒宴。催。延。年。賀。多。小。一人の老翁。葉香。行。煙。の。沙金と文。成持。未。賀。延の文。堂の上。置。何。も。言。で。去。多。小。人。不。定。案。母の道真卿。不。斯。と。達。し。即。ち。其。文。を。披。れ。見。し。不。其。文。辞。小。菅。家。の。人。人。師の知命。賀。せ。多。小。因。て。此。沙。金。を。贈。る。多。小。金。ハ。思。心。の。狂。う。ぬ。表。し。沙。金。の。數。限。り。か。人。吏。を。祈。る。多。小。あり。と。あり。誰。が。所。為。と。も。不。知。し。後。日。小。帝。乃。御。所。為。なる。吏。相。知。り。減。小。御。見。負。の。睿。慮。の。程。と。難。有。り。多。小。時。小。春。宮。敦。仁。君。ハ。

御幼稚の時より学向を好まむ。御座るる。一時道真卿令旨を下され我聞唐土六日小百首の詩を作し人足彼數人有とす。卿幼少の時より詩を作り況今文学小富々智其不出者なり。彼一日小百詩を賦せし物七歩小奇句と吐し其の中少者多し。依て一時の内小十首の詩を作て見す。依て題戎給りるを。道真卿少も詩六す領掌ありて其日の酒の刺り成の刺の初まで小安くと十首の詩を賦して献りし。其中少も殊小秀逸とせえん。唯別殘鶯與落花。今宵旅宿在詩家。右の詩は後年大納言公任朗詠集を撰し時加られ。其次の年道真卿春宮の御所へ奉られ。敦仁親皇御多。去年一時小十首の詩を作し。依て卿の宏を知らし。試小今二時の中小十首の詩を作て。やと望む。いづれにや。

御更小して更小辭し。色もわく。酒の二刺より成三刺まで。只一時の中小十首の詩を作て。献りし。親王も卑下達も其達才を感。前代未だ例を聞か。後世亦有す。れ。機を賞美せし。右の詩三首。矢て十七首。菅家詩集小。九年の春藤原時平と大納言公任。左大将と兼められ。菅原道真卿を推大納言。任。右大将を兼せし。斯て春過夏小。帝。度。御不例。道真卿奉りし。春宮。小十三。殊更聰明。睿智の聖君。在。御。鎌位。義。不可。勅。答。帝。御。欣。在。日。辛。七月。十三。日。春。宮。敦。仁。親。王。小。脚。元。服。進。せ。万。乘。の。密。位。を。禪。り。の。御。身。ハ。脚。飾。と。落。さ。せ。の。以。て。朱。雀。院。入。せ。の。以。て。亭。子。院。の。君。と。又。實。平。法。皇。と。も。や。な。り。吾。朝。小。法。皇。の。尊。号。有。此。帝。より。始。り。なり。

醍醐天皇御即位 時平乱行奪叔父妻條

春宮敦仁親王入皇二十代の帝祚小幼ゆひ此君を醍醐天皇とすなり即ち先
帝年第一の皇子小て御母勸修寺内大臣高藤公の御女皇子とす世小承香殿
の女御とすなれり寛平五年春宮小立せのひ日九年十三才小て登極しゆ入皇
年号と昌泰元年と改元ありて先帝小上天皇の尊号と奉りゆ藤原時
平と菅原道真卿と兩卿相並んで朝政を執行せり其義大臣小准せり
是當時大臣の官なれり抑道真卿御年五十才天の生る英小て和
漢の經史小涉むぬ隈ゆなく博學多聞ある上忠直篤行の君子なり又時
平八照宣公の嫡男小て其家系小於た双者ぬれ貴族とれども生年とす二十
七才也の好色放蕩あるのみ子己を慢ぶ能を妬む性ある道真卿と
天地雲壤の違なり時平乱行の第一とす時時平我館日未阿利被

聚て酒宴と雜談せれる中少當時世小勝る美人といひ維あるを問れ
るに平貞文といふ者答て當世の美人とす君の御伯父大納言酒經卿の北堂
小勝る女性かといと言ふと時平耳小通其夜の酒宴果て皆退散しりり
翌日叔父酒經の許使者を遣り子細有る夜貴館へ方違小参り由言せり
む酒經我甥かき當時推勢肩を並る人ゆぬ時平の頼めれを二儀あり
及ず承引の旨返答して使者を返し俄小山海の珍味を取寄させ即中掃淨
まりて饗食應の準備を細相待れり小其夜時平意小適し葦と月伴りて叔
父の館へ到りしに酒經大に尊敬して客殿へ請ひ顔て酒宴をもちり美
を尽して饗食應し管絃を奏し歌舞をたせし兵を添られり借酒宴の
半酣小及びり頃酒經秘藏の琵琶を取出して引出物とす時平進せり
小時平謝して此賜も忝ふれり今宵の御饗食應小北堂の貝余小入り

こゝれと望まれれば國経の何の氣も付ず。夫と最安丸御更なり。北堂
は呼出し時平を拜せり。和琴を弾せしめり。元来國経は年稍
堂のいさゝ若かりしを平生小夫を厭意あり。時平初て叔父の妻を
らるる小貞女が言し。十倍増す佳小。窈窕なる顔は桃李のごと。婢
娟も姿揚柳小。似て羅綺なる堪ざる風情艶小。わてわりのあらず。春君の
細く手小て掻鳴を和琴の音色妙なる小。痴声も新嘗の囁も如く。人
を縲りて寒く。むらぶ。色好の時平。忽ち眼を奪られ魂を湯に頻
小目とて情を送り。あゝ心成りけり。北堂も折し時平の方と云れり。由
時平信心動れ。左右して國経小。酒と勧め酩酊と呑んと巧まれる。國経も
時平の心術を知す。強らるる。數盃を傾け果は前後と忘る。小酔酔す
れども時平と見ると叔父小。向ひ今宵の御食應は穢小。遭がれ盛饌や

庶幾は今宵の御引出物小。北堂を我小賜らん。やと傍若無人小。所望せしめり。小
経は大小酔まれ。折れは只是當座の戲言あり。心得何の思慮もあり。即座と
あむ。國経が余も進す。増て況妻小。於老具と還り。と云れ。古小。各其
俸席上小。酔伏れり。時平仕する。と云。と独笑し。北堂を無体小。引立席とて。云。出
婦人を我車へ抱れ。乘其身也。小乗て我館へ還られ。誠小。乱行も無道と云
論せん。多行条なり。多。國経は夜風の身小。寒小。酔醒て眼と覺し。座辺をよる。北
時平小。下小。還られと覺し。只不皿盤盃の狼藉する斗成を。近侍の女房小。北堂の
義と問さる。小女房答て。前小。時平の君御臺所を引連て。まひり。何方へ伴ひ。小
やと問さる。侍小。叔父君の我小。賜り。と侍て。歸るなり。と云。御車小。乗す。と云。時平
由と小。乗て。歸り。多り。と云。多。國経は。外小。孩れ。我酔醒し。と何更を言。と云。小
覺す。時平も酒與小。乘す。當座の戲れ。小。侍て。歸られ。おも。多。心。迎を遣はせり。と

使者と時平の館へ走らせ先刻光駕と曲られ忝く御座奥小患妻を召連
御歸右より。國経耽酔して御見送付す失敬の罪を免れ賤妻を歸し給はる
中遣されども時平執奏の青侍を以て先刻八種く奔走小預り怡小不堪其地堂
を御引出物小賜りしを辞退小及む具と還りぬ上今更返し進せが言
せ敢て返されざるを使者も為方なく歸て主人小時平の及答の趣を告ぐる
小。國経惘果最愛の妻と奪れ妻あぬ身と燈と恨と憤れども當時執政
の時平も何を奈何とも仕が。無念あが其終き置れども時平は彼婦人を奪とり
てより昼夜側を放まず寵愛し遂小子と儲られ。後小中納言敦忠と中八是あり
此北堂は在原兼平の子息棟深の女と。是小依て世人知も不知も時平の不義我
意を爪弾して憎と妬と。其推勢小怕と難う一表向て練言するも無り
斯て昌泰二年己未の二月帝の睿慮して時平と左大臣小任し道真卿を大

臣小任し。此時より道真公を世人管丞相と稱す。丞相大臣の唐名なる也。
又此時帝の外祖藤原高藤仁明帝の皇子より源光二人もいふが。大納言は
菅公心中思召る。時平は照宣公の子息して代々大臣の家柄なれ。左大臣小任し
支理の當也。我ハ儒官の卑れ起りて家小例か右大臣小登用せられ其位貴
族より高藤光等の令より上小支障あり。先年渤海の使者裴頰我を相し位
三公小昇る。高直小居む身小災害及なりと言。先見符節を合す。如
丸國家の為存。身小禍の及ハ忠臣も者の厭分る。あられも貴族と乘踏
其上小主人と高天へ畏ありと。表と奉りて再三官位を辭し。主上由上皇由敢
て勅許なり。時平は若冠なれ。彼を佐て朝政を平らす。との倫命れ
た己更然得ず。其終小過させのい。斯て時平と菅公八月交小朝政を聽れ。小
時平公每度依估員負の裁許す。諸人恐も排り。其當番の月小新給る。

菅公ハ裁判平ク然由仁忍を旨として新裁聽の事我猶人の如くある也
滞りあるとて諸人悦伏し御當番の月ハ自茲新入あり衆人菅公明断之感
賞美する小付て時平の不決断薄徳を排ね者なり多左府の吏あり
を以て菅公の名譽を妬み君小終奏して官位を削落さんと思はれり
忠正の菅公一点の御過失も無かれを奏す能く種もなきあり吏か出来より
思ふ多小彼源光ハ菅公小位階を起られんと無念小思ひ時平小阿利猶ひ
俱小菅公於退人謀り加えあらず泉大將定國大納言清貫右中弁希世藤菅
根平貞文紀蔭連久日未左府小阿波と革菅公於妬み時時平の館
小會令專ら菅公と追退く能く邪謀於高議一々

扶桑皇統記圖會後世編卷之五畢

